

「おらえのばばはん」

父の父、私の祖父は父が18歳の時に亡くなったそうで、茶色くなった写真でしか知りません。祖父(じいちゃん)は若い頃は警察官で明治30年頃に日本が統治していた台湾(台南地区)に10年以上勤務していたそうです。

(明治28年に勝利した日清戦争で清朝が台湾を割譲し、日本最初の植民地として台湾総督府が置かれ太平洋戦争終結の昭和20年まで50年間統治された。イギリス、フランス、ドイツ等の列強国との勢力拡大の拠点となった。祖父が赴任していた頃は後藤新平が民政長官で台湾人の抵抗運動を抑え、樟脳(楠木から出る万能合成樹脂:セルロイド)産業の立直しをはかり、貿易を拡大していった時期のようです)

祖母(ばばはん)も娘(私には伯母さん)と後から籠、汽車、船を乗り継いで夫のもとへ行ったそうですが、亡くなる寸前まで思い出話を、にこっと一笑いしてから語ってくれました。

何回聞いても面白くて、ねだっては同じ話を繰り返し聞き直しながら場面を想像しておりました。特に九州からの客船での怖かった便所の話とか、高崎山の猿に帽子を取られた事とか現地人の女中さんを雇っての裕福な暮らしとか茶色く薄くなった写真を見ては面白可笑しく遠い昔を思い出しながら冬コタツの中で語ってくれました。

祖母は私が中学生の時に81歳で亡くなりましたが小学校に入るまで一緒に寝ていたと思います。祖母の湯たんぽ代わり(肉たんぽ)で布団に潜り込むと昔話(花咲か爺さん、酒天童子、一寸法師など)や唱歌などを聞かせてくれました。

雪が融けると河原に行ったら釜戸の焚き木にする流木を拾ってきたり、煉り薬を造る為にヨモギの新芽を一杯摘んできては釜で何回も煮立て(エキスを水抽出)て黒くどろどろになったところで薄荷を混ぜて完成するばばはん特製の秘薬でした。

腹が痛い、風邪気味だといったは飲ませ、転んで擦り剥いても煉り薬を塗ると治りました。

今は誰も造っておりません。一度チャレンジしてみたいと思っております。

お稲荷はん、地藏はん、お寺の雑草とりを暇さえあればやりました。金魚の糞のように着いて行ったら遊び場にしていました。

子供や孫の安寧を祈りながら草むしりに精を出してくれたお陰で今があると感謝しております。

町の地藏堂に月一度ご馳走を皆で持ち寄って食事会(地藏講)があって小学校に上がる前に何回か一緒に行った事があります。先ず円形に座りお珠玉のお化けのような大きな輪を念仏を唱えながら廻していき大きな玉が来ると玉を持ち上げて拝みます。いわれは判りませんが年寄りが一心に祈っていた事は間違いありません。最後はご馳走を分け合って食事をして解散です。まだ食糧難の時ですから大した料理ではなかったと思いますが地域を結び付ける老人の務めだったのでしょうか。

越中富山の薬売り、農家の野菜売り、魚屋とか毎日いろんな人が顔を出しては一服して行きました。

祖母は誰にでも「上がってお茶飲んで行けば・・・」と言ってお茶と漬物で接しておりました。

一期一会、温かさが伝わりますが、情報交換の場づくりでもあったようです。

祖父は台湾から帰国してから郵便局の仕事をしていましたが勤務中に倒れて亡くなったそうです。その為か祖母には少々の遺族年金(恩給)が出ておりました。これが祖母の刻みタバコ代と焼酎代になっておりました。明治の女性は喫煙者が結構多かったようです。冬でも夏でも火鉢には熾き火がいつも大切に在りました。焼酎は20度の量り売りで4合ビンに買ってくるのが子供達の役目でした。

薬だと言って毎晩5斤位をお湯割にして大事に美味しそうに飲んでいました。

隣には下駄屋のづづはん(祖母の弟)が住んでおり、冬は仲良く二人でコタツの中で晩酌してました。

日露戦争の戦士で顔に名誉の傷を負い、軍服をまとった写真を見せて思い出話をしていたようです。

今、外孫が遊びに来て2~3日泊まって帰るとへトへトに疲れてだらしのない自分で、おらえのばばはんには足元にもおよびがつかないと思う今日この頃です。

内孫男子5人を親代わりで育ててくれた祖母も80歳を過ぎてから寝込むようになり、姉よりは長生き出来ないと気に掛けながら赤ちゃんに戻ったように可愛いばばはんが亡くなりました。

明治10年、西南の役に生まれた高島田の似合う粋な明治の女性でした。